
金磁砲の使い方

マターリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

金磁砲の使い方

【Nコード】

N6774Y

【作者名】

マターリ

【あらすじ】

リタの研究手伝うためロシアに来ていた朝陽とアーニヤ、人呼んで『金磁砲』（ゴールドエレクトロン）コンビ。正体不明の洞窟に入っていくとそこは……？

注意、この小説は「絶対博士コーリツシュ」と「IS インフィニットストラトス」のクロス小説です。といってもコーリツシュは多分出てきません。あしからず。

また、作者は初投稿なのでえらい酷い文になると思いますが、温か

目で見守って頂けたら幸いです。誤字脱字や「日本語おかしくね
?」的な指摘はごんごん下さい。

File 0 #厄介事へ面白いもの《（前書き）

注意！

この小説は「絶対博士コーリッシュ」と「IS インフィニットストラトス」のクロス小説です。「こんなのISじゃない！」という方や「こんなもん絶対科学の欠片もねえわっ！！」という方はブラウザバックボタンを押される事を推奨いたします。それでも良いという方はどうぞ

File 0 #厄介事へ面白いもの

俺たちは今、ロシアの森奥まで来ている。

俺たちって言うのは、俺と、アーニヤと、アジヨイと、リタさんの四人だ。

「オイオイ引きこもりい、オレっちの事を忘れてもらっちゃあ困るぜい？」

「ワンワンオー！」

「色々言いたい事はあるが取り敢えず心読むなモンタ。あとジヨデイーは何言ってるか泣かんねえから」

そうだ、こいつ等を忘れてた。何かよく分からんタヌキはモンタ・J・J。リタさんの弟子？ 助手？ まあどっちでも良いか。

でもってこっちのロボット犬はアジヨイ作「絶対番犬シリーズ」の一作、小型犬型番犬ロボットのジヨディーだ。ちなみにこいつははっきり言って番犬とかそう言うレベルじゃない。こいつが守っている家に泥棒が入ったら俺は間違いなく泥棒の方に同情する。

閑話休題。

今回の目的は、っていうか俺はもう親父を見つけたから目的なんてリタさんの化石発掘だけだ。ああ、後たまたアジヨイが何か言ってるやがるな、どうでも良いけど。

「朝陽くん、ここら辺一帯を衛星でスキャンしてみてくれない？」

「はいはい、今やってますよ……っと。お、来た来た。もうちよい西の方になんかあるぜ」

「さっすが朝陽君、じゃ僕はもうちよつと寝」

「そうはいかせねえぞオイ、もうお前の出番だろうが」

「えええ〜。だって此所寒いじゃん、僕やる気でないよ」

「煮干しでも食ってる。てか、此所よか南極の方が寒かっただろ」

「はあ、分かったよ。おーい、リター、アーニヤちゃん、もういくよー！」

「ハイハイ！ ほらアーニヤちゃん、いくわよ！」

全員でアジヨイ開発の雪上車に乗り込む。原動力はエーテル（火、空気、土に次ぐと言われた第五元素）だから結構広い。だが、

「朝陽くん、ご飯作ってー、ご飯ー」

「アサヒ、ご飯つくって」

「ご飯ー？」

「てめえはキモイから断る、アジヨイ」

「そんな！ ご飯抜きだなんて……僕もうこれ運転できなくなっちゃうよ！」

「そしたら私が引つ張っていくわ」

「おう、頼むなアーニヤ」

「じゃ、アジヨイは置いて行くって方向でオツケー？」

「異議なし」

「ちよ、ちよっと待ってよ！ 冗談、冗談だから！」

前まではアジヨイやりタさんにいじられてた俺だが、最近はみんなであつてたかつてアジヨイをいじるのが日課だ。まあ、アジヨイは時々しかこないからなんか違和感があるんだよな、その影響か？

「皆ひどいや……っと、着いたよ」

目的地に着いたようだが、生憎アジヨイ以外は飯食ってる最中……いや、皆食い終わったな

「じゃ、そろそろ行くこうかしら？」

「もうちよっとゆっくりしてからの方が良いんじゃない？」

「言っとくけどお前の飯は無いからな、アジヨイ」

「嘘だつ……！！！」

そんなネタ分かる奴此所には俺とアジヨイくらいだろ。

「まあ嘘だけだな、ホラ、握り飯だ」

「ほああ……ありがとう朝陽君！……ツンデレ乙^{ボソッ}」

「おい表出るか？ ああ？」

「アサヒ、早く行きましょう」

「お、おう。そうだな」

アホに構っている時間がもつたない。さっさと行きますか。

「朝陽君、ここら辺で何か面白そうな物はある？」

「うーん、そら衛星から見る限りだと二つほど。どうする？」

「はいはい！ ここは二人組で分かれるべきだと思いまーす！」

「お前キャラ崩壊激しいよなアジヨイ」

「それは作者の所為だつて。それはとにかく、どう分かれる？」

二人ツマンセル一組は決定なのか、別に良いが。

「私はアサヒと行くわ」

「おお、アーニヤちゃん大胆だねえ？」

「じゃ、私とアジヨイチーム対朝陽君とアーニヤちゃんチームで競争ね！ はいよいいドン！」

それと同時に駆け出すリタさんとアジヨイ。いや待てこれって…

…。

「行くわよ、アサヒ」

「いや、待て落ち着け。俺を担ぎ上げるのはやめるんだアーニヤ」

「だってその方が速いもの」

「……そうだけど」

そうだけど、これは不味い。いや美少女が大の男担いでる絵面がとかではなく、純粋にアーニヤのスピードがヤバイ。こないだアフリカ行った時にチーター置き去りにしてたのを俺は見ていた。そんなスピードで走られたら……！！

「行くわよアサヒ！」

「いや俺はまだ逝きたくな……！！！」

「……死ぬかと思った」

「あれくらいじゃ人は死なないわ。オートバイもあれ位は出るはずよ」

「オートバイの速度を後ろ向きで担がれて動いたら普通の人間あら大体こうなるわボケ」

「やっぱりかっこわるいわ、アサヒ」

「やっぱり可愛げねえなお前は……!!」

軽口を叩き合いながらも目的地に到着する。因みにあの後目的地のすぐ側までは10分位で着いた。まさに化け物女アーニヤ。伊達にクマを素手で倒せる訳じゃない。

「……なんか、不気味だな、ここは。アーニヤ、何か見えるか？」

「いいえ、何も見えないし何も聞こえない。何かおかしいわ、ここ

……」

「おかしい、か……」

これはどうするべきだろうか。正直、この中に言っても見たいという気持ちはある。というか、こんな正体不明の場所があったら考古学者じゃなくても入ってみたくなるだろう。男なら。

が、ともかくはリタさんたちに連絡だ。このまま入って行って行方不明、つてのもあり得る。実際何回かはそうなりかけたしな。お、繋がった。

「あーあー、こちら金磁砲班、絶対科学班応答願いまーす」

『はいはい！こちら絶対科学班、今金磁砲班そっちに連絡しようと思つてた所なのよー。どうだった？そっちはいい感じ？』

「ああ、はい。何か正体不明の洞窟みたいなのがあるが、そっちは？」

『へえ……、なかなか面白いわね。実は、こっちにも同じようなものがあるのよ。正体不明、ジヨディーのセンサーでも先が分からないような洞窟が？』

「そっちにも……？へえ、それは確かに面白い。どうする？こ

のまま引き返すか？」

『んもう、朝陽君ったら。分かってて言ってるくせにい？』

「取り敢えずアジヨイは後で一食飯抜きな『そんなあっ!!!!』!!…

…、冗談だよ」

さてこうなったら答えは一つだ。

『真実を計る天秤の』

「左に危険と死を」

「右に無限の夢を」

『誰も知らぬ暗黒の領域へ』

『「「「導け、絶対科学()でしょ?」()だよね()よね、アサヒ()
()だろ?」「「『』

研究開始だ。

File 0 #厄介事へ面白いもの《（後書き）

初投稿……ども

俺みたいなクソ小説書く奴、他に、いますかっていねーか、はは

ちよ、やめてー、石は投げんといてー

ごめんなさい調子に乗りました。

初投稿は本当なのでこれから更新できるかどうか既に心配なのですが、よろしく御願います。

読んでくださった皆様、感想御待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6774y/>

金磁砲の使い方

2011年11月20日18時27分発行